

Le Bouddhisme de Nagarahâra et de Haḍḍa

Akira Sadakata

Cet article vise à éclaircir les aspects du Bouddhisme à Nagarahâra et à Haḍḍa. Ces lieux, situés entre l'Inde propre et l'Asie Centrale, peuvent, de ce fait seul, arrêter l'attention des bouddhologues qui étudient l'histoire du Mahâyâna. Il y a trois sortes de sources à confronter : 1) sources grecques qui, en racontant l'expédition d'Alexandre le Grand, parlent de Dionysopolis qu'est Nagarahâra ; 2) récits des moines chinois qui allèrent en pèlerinage aux Indes ; 3) rapports des européens modernes qui explorèrent les sites de Haḍḍa, surtout ceux de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan.

Confrontant ces sources, je ne suis arrivé à aucune affirmation, mais j'ai pu, au moins, constater la présence indéniable des éléments hellénistiques ou romains à ces lieux laquelle aurait pu, à mon avis, influencer les pensées du Bouddhisme.

- 54) 拙論：「バーミヤーンの仏教」 東海大学紀要（文学部） 第12輯 1969, pp. 28—29.
- 55) 〔8〕 pp. 10—11.
- 56) 〔10〕 p. 9.
- 57) 〔13〕 p. 139.
- 58) 〔13〕 p. 145.
- 59) 〔13〕 p. 158.
- 60) 〔11〕 pp. 83—84.
- 61) 〔11〕 p. 79.
- 62) 〔13〕 p. 161.
- 63) 高田修：Op. cit. p. 256.
- 64) 〔5〕 pp. 72—73.
- 65) 〔5〕 pp. 74—75.

（第一外国語 専任講師）

版5 (フォンドキスタン出土の布髪授記像)

29) 「然灯仏の起源とナガラハーラ」 印度学仏教学研究 第19巻 第1号 1970.

30) 法顯によれば、シャカが自らの肉をさいて鳩の命をあがなった場所 (スワート) [玄奘によればウッジャйна], 眼を施した場所 (ガンダーラ), 頭を施した場所 (タクシラ), 身を投じて飢えた虎のえじきとなった場所 (タクシラ) [玄奘によればシンハブラ] があり, 玄奘によれば, 上記の四つのほかに, 半頰の法を聞くため命をすてた場所, バラモンに布施するため, 自分を縛らせて売らせ, その代価をとってもらった場所, 正法を聞くため自らの骨を折って筆とし経典を書写した場所, 饑饉で人が病いに倒れるのを憐み, 大鱗^{うおぼみ}となって人々の食物となった場所, 蘇摩蛇となって薬として人々に食べられた場所, 孔雀王が仲間のために崖をつついて泉を出し, かわきを救った場所, 自らの血で五匹の夜叉を養った場所 (以上, ウッジャйна), 竹で自らを刺して血を出し, 飢えた獣を養った場所, 悪夜叉を教化して, 肉食を思いとどまらせた場所 (以上, シンハブラ) がある。

ほかに, 今生のシャカにまつわる神話的物語が結びつけられている場所もある (悪竜を教化した場所, 足跡を残した岩, 衣を洗った石——いずれもウッジャйна)。

31) Cf. 平凡社世界歴史事典 5-195中

32) Cf. *ibid.* 3-57 下

33) 拙論「バーミヤーンの仏教遺蹟について」東海大学紀要 (文学部) 第11輯 1968, p. 69, (註97)

34) 大正22, 783 a.

35) *L'Inde Classique*, Tome I, § 1057.

36) Cf. 平川彰: 初期大乘仏教の研究 春秋社 1969, p. 699 以下。

37) 大正51, 858 b, 865 c.

38) 大正51, 879 c, 938 a.

39) 大正51, 1021 c-1022 a.

40) 大正51, 977 c (『往五天竺国伝』中)

41) 大正51, 979 c (『悟空入竺記』中) ナガラハーラに言及したものとして, ほかに「釈迦方志」(大正 51, 954 b-c) があるが, その記事は「大唐西域記」のそれのひき写しである。

42) [12] p. 133.

43) 高田修: *Op. cit.* p. 83.

44) ハッダの探索はすでに19世紀前半, マッソン, ホーニヒベルガー等によって行なわれている。しかし, 学術的, 組織的な調査が行なわれたのは, 20世紀初頭, アフガニスタン考古学フランス調査隊 (*Délégation Archéologique Française en Afghanistan*) の手によってである。まず, 隊長のフーシェや隊員のゴダールが予備的調査を行ない (1923), 次いでバルトゥーが本格的な発掘を開始した (1926年1月)。遺蹟約30のうち13が発掘された。その結果, 500以上の塔と, 13,000~16,000の像, 小像が掘り出された。像および小像の殆んどが現地の狂信イスラム教徒の手で破壊されたが, 残る 3,000~4,000 の頭や装飾断片 (*têtes ou ornements*) がフランス政府とアフガニスタン政府のあいだで折半された。前者に帰属したものは一部, パリのギメー博物館に保管され, 後者に帰属したものはカーブル博物館に収蔵された。 ([9] Préface).

45) [9] p. 14.

46) [9] pp. 13-14.

47) [9] p. 17.

48) [9] p. 18.

49) [9] p. 19.

50) [9] p. 38.

51) [9] pp. 64-65.

52) [13] p. 156.

53) [11] pp. 77-78.

- 10) J. Hackin: *L'Œuvre de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan (1922—1932)*, I Archéologie bouddhique, 1933.
- 11) B. Rowland: *The Art and Architecture of India*, Pelican History of Art, 1959 (初版1953).
- 12) 水野清一 「ヒンドゥ・クシュ南北の仏教遺跡」 文明の十字路口 京都大学学術調査隊編 平凡社 1962.
- 13) B. Rowland. 「ハッダ」 アフガニスタン古代美術 日本経済新聞社 1964 (笹口玲氏訳)

註

- 1) [9] p. 5.
- 2) Simpson: J. R. A. S. N. S. Vol. XIII, p. 183.
- 3) 2世紀のギリシアの地理学者プトレマイオスの地理書に Nagara Dionysopolis と出ている (lib. VII, C. I, 43) 詳しいことについては J. W. McCrindle: *Ancient India as described by Ptolemy*, Calcutta, 1927 (原版 Bombay, 1885), pp. 113—115 を参照。
- 4) Cf. Arrianos: *Anab.* V, 1—3.
- 5) Cf. *ibid.*, V. 3, 2.
- 6) Strabon: *Geog.* XI, 5, 5; XV, 1, 9. および Arrianos: *Anab.* V, 3.
- 7) Arrianos: *Indikē*, 5.
- 8) *L'Inde Classique*, Tome I, § 1059.
- 9) *Ibid.*, § 1049.
- 10) *Ibid.*, § 1057.
- 11) *Ibid.*, § 1053—§ 1056.
- 12) *Ibid.*, § 1057.
- 13) Arrianos: *Indikē*, 8.
- 14) *L'Inde Classique*, Tome I, § 1044.
- 15) 高田修: 仏像の起源 岩波書店 1967 p. 288 註 (9)
- 16) Strabon: *Geog.* XV, 1, 58.
- 17) *Ibid.*, XV, 1, 33.
- 18) *Ibid.*, XV, 1, 8.
- 19) [5] p. 73.
- 20) E. Jacquet: *Mémoire sur les découvertes archéologiques faites dans l'Afghanistan*, par M. le Dr. Honigberger, *Journal Asiatique*, 1834, p. 381. (Haḍḍa を “ville du Crâne” と訳している)
Th. Watters: *On Yuan Chwang's Travels in India (629—645 A. D.)*, vol. I, p. 190. (薩羅は Śīla に対する地方的発音 Hīlā を音写したものであろう、といっている。)
- 21) Cf. 酒井敏明「バミールをめぐる交通路」史林 1962年 第5号 p. 82.
- 22) 大正15, 679 b—681 c. 筆者はさきに「ナガラハーラの名は観仏三昧海經の中にない」と記したが(バミヤーンの仏教)東海大学文学部紀要, 第12輯, 1969, p. 38), それは恥ずべき間違いであった。謹んで訂正する。
- 23) 大正15, p. 645 の脚註⑥。(東大寺本に「宋永初年仏陀跋陀羅揚州訳」とある。)
- 24) 大正51, 858 c—859 a.
- 25) 大正51, 878 b—879 b.
- 26) 大正50, 229 b—229 c.
- 27) 大正50, 229 c. 然灯仏の伝説は英訳がある。S. Beal: “Legend of Dipaṅkara Buddha”, *JRAS*, N. S., Vol. VI, pp. 377 ff.
- 28) A. Foucher: *L'Art Gréco-bouddhique du Gandhāra*, Tome I, 1905, pp. 273—279. および [13] 図

ッパ中世のゴシック彫刻に似ていたのである。この類似は今日、次のように説明されている。すなわち、いずれもローマ帝国の辺境に生れた、ローマ地方芸術の一つなのである⁵⁹⁾、と。これらの芸術は写実性と精神性 (pathos) とによって際だっている。その悲哀に満ちた表情は石の彫刻にはみられない深い内面性をたたえている。それは、自信をもって阿羅漢の道をすすむ「小乗仏教徒」によりも、現実と理想のあいだに立って苦悩する大乘仏教徒の精神につながるものである。仏教文献はハッダの仏教の性格について黙して語らぬが、芸術においてこのようにローマ世界の強い影響がみられるとすれば、仏教の思想にもそれが何らかの影響を及ぼしたとしても、少しも不思議ではない。一民族の宗教たることをやめて、あるいは一部の人の救済にあまんずることをやめて、一切衆生の救済を求めてやまぬ宗教が出現したのも、世界の統合をめざしたヘレニズム世界およびローマ世界の汎世界的思想と無縁ではないかもしれない。

ハッダの美術のはじまりについては、ロウランドの次の意見が参考になろう。「ガンダーラ仏教建築にドーリア的要素やイオニア的要素はなく（筆者註 バルトゥーの見解と矛盾！）、コリント的要素が支配的である。これはガンダーラ美術が全くローマに（筆者註 古いギリシアではなく）起源をもつことの証拠である⁶⁰⁾」また、人物をとりこんだ龕の列 (homme-arcade) は「ローマ美術において、2世紀のシダマラの石棺より以前にはみられない⁶¹⁾」という。

ハッダの仏頭は鋳型でつくられ、唇などの変化に富む部分だけが手につくられた。それは仏頭の製作を機械的ならしめ、発展を阻止し、様式化された仏頭を大量生産せしめたかもしれない。儀規が様式の固定化に関与したかもしれない。いずれにしても、仏頭の様式は非常に単調である。

ハッダの芸術活動の下限年代については、マッソンが発見したビザンチン貨幣により、少なくとも5世紀まで下げることができる⁶²⁾。高田修教授は塑造美術の隆盛の期間として、後4世紀末～5世紀中葉という年代を与えている⁶³⁾、比較的後世の要素として、僅かながらイランの影響もある。すなわち、アッカンの指摘した、「太子出城」図（〔8〕, III, P1.46）中の妃ゴーパーの頭飾りにある半月と日輪がそれである。これと同類の飾りが同じハッダからも一つ出ているという⁶⁴⁾。「太子出城」図中の太子や妃のからだつきには後世のインド的豊満さも現われている。しかし、一般に、ササン朝やグプタ朝の影響は少ない。アッカンはハッダ美術のもっとも新しいものを8～9世紀の作とする可能性を考えている⁶⁵⁾。

ハッダの遺蹟に関する参考文献

- 1) E. Jacquet: "Notice sur les découvertes archéologiques faites par Martin Honigberger en Afghanistan", *Journal Asiatique*, 1836, II, 234; 1837, IV, 402; 1839, VII, 385.
- 2) H. H. Wilson: *Ariana Antiqua: A descriptive Account of the Antiquities and Coins of Afghanistan*, with a Memoir on the Buildings called Topes, by Ch. Masson, London, 1841.
- 3) W. Simpson: *Jl. Roy. As. Soc.; Trans. Roy. Inst. Brit. Architects*, 1879—1880, pp. 37—64.
- 4) A. Godard: *Exposition de récentes découvertes et de récents travaux archéologiques en Afghanistan*, Paris, 1925.
- 5) J. Hackin: "Les fouilles de la Délégation archéologique française à Haḍḍa", *Rev. des Arts Asiatiques*, Tome V, 1928, pp. 66—75.
- 6) J. Barthoux: "Bāgh-Gai", *ibid.* pp. 77—81.
- 7) J. Barthoux: *Recent Explorations by the French Mission in Afghanistan*, *Annual Bibliography of Indian Archaeology for the Year 1928*, Leiden, 1930.
- 8) J. Barthoux: *Les Fouilles de Haḍḍa*, III, figures et figurines, 1930.
- 9) J. Barthoux: *Les Fouilles de Haḍḍa*, I, stūpa et sites, 1933.

物像に似た像（17図、18図参照）。ヘレニズム時代の名彫刻家スコパスの作品に似た男の顔⁵⁵⁾。ふところに花をもつハッダの人物像の姿が、ハドリアヌス帝の寵児アンティノオス（110頃～130）のそれに酷似しているのは、決して偶然のことではないであろう⁵⁶⁾（19図、20図参照）。

17図 ハッダ出土の魔衆（〔8〕Pl. 100, Pl. 101 より）



18図 最後の審判の図 Gelnhausen
のマリア教会、1240ごろ
（久重氏所有の写真より）

19図 花をもつ人物 ハッ
ダ出土（〔8〕Pl. 137）

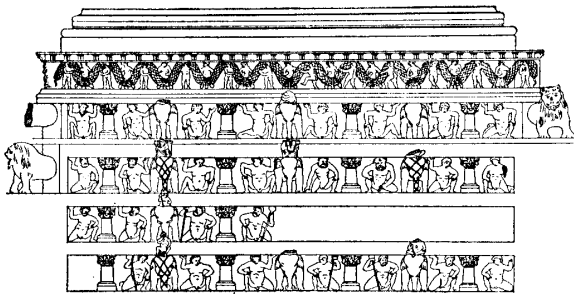
20図 アンティノオス ラ
テラン美術館（ローマ）
（〔10〕Fig. 5より）



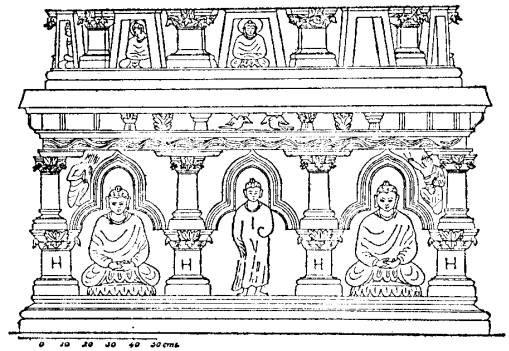
このように顕著にローマ的なものは、ハッダ西北120キロのベグラム宮殿址からも大量に発見されている。ベグラムはかつてのカピシ（玄奘の迦畢試）で、玄奘の記録する伝説によれば、カニシカ王が中国人の質子のために夏の住処としたところである（冬の住処はインド，春秋のそれはガンダーラ）。その宮殿は第2クシャーナ朝（カニシカ王がこの中に含まれる）のものとみられ、次のような数々の貴重品が世に知られるようになった（1937～40）。ローマ製秤の錘り，ローマガラスの断片，ギリシア・ローマ青銅の小像，ギリシア・ローマの神話の石膏門板，インドの象牙浮彫板，中国の漆器⁵⁷⁾。いずれも最高級の製品である。これは当時この地がいかに関東の貿易の重要な中継地であったかを示す証左となる。ロウランドはカピシの繁栄の頂点を，ローマ帝国が対外的に広く発展した1～3世紀の間とみ、241年ササン朝のシャープールI世の攻撃によってクシャーナ朝は崩壊したとみる。発掘品の製作年代に関しては、それと同類のガラスや青銅の作品がポンペイ（西紀79年火山灰によって埋まる）から発見されていることにより、1世紀と考えている⁵⁸⁾。

ハッダにおける、このように顕著なローマ的要素が、ハッダの仏教にとってどのような意味をもつかが大いに興味ある問題である。ハッダの彫刻は、フランスの学者をして、ただちにランス（フランス東部の都市）のカテドラルの彫刻を想起せしめた。それほどハッダの彫刻はヨーロ

12 図 ([9]より)



13 図 ([9]より)



14 図 仏頭 ハッダ出土
([8] Pl. 26 より)



15 図 女神アテネ ハッダ出土
([8] Pl. 53 より)



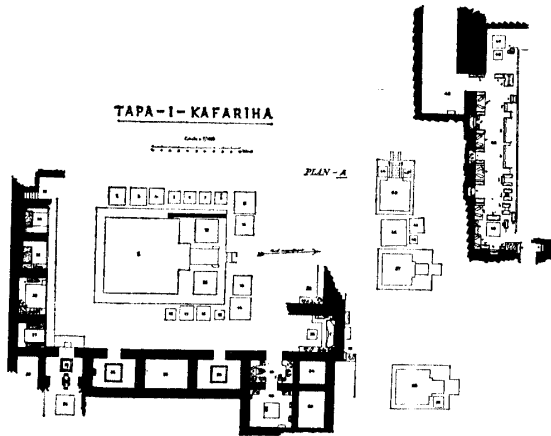
16 図 仏伝図 ハッダ出土
([8] Pl. 40 より)



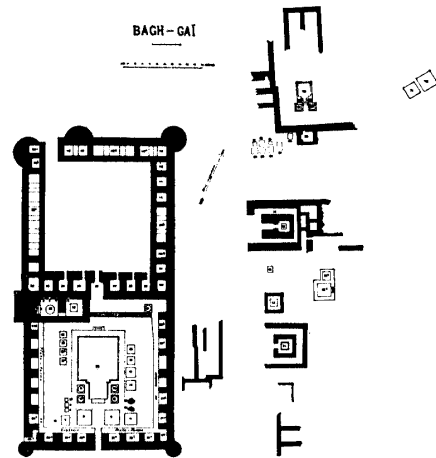
くに寄進者や魔衆を表わしたもの)のそれは柔軟で、生き生きしている。ストッコの使用について、ロウランドは次のように言っている。「ストッコ彫刻の技法はおそらくアレクサンドリアから紹介されたものであろうが、この材料(ストッコ)は、アレクサンドリアで後期ヘレニスティック時代とローマ時代に、大理石の安価な代用品として使用されたものであった⁵²⁾」また、彼は別の論文では次のように言っている。「建築装飾にストッコを使用することはイランにその起源をもっていた。西紀 241 年のササン朝の侵入が、全ガンダーラにおける、後期の、殆ど全般的なストッコの使用の原因になったことは十分考えられる⁵³⁾」因みに、ハッダより更に西北のバーミヤンでも、初期の仏像の材料と様式はハッダのそれをうけついでいる⁵⁴⁾。

次に、ハッダの像の様式がローマ美術の影響下に生みだされたことが誰の目にも明らかである。それは片岩に刻まれた像のぎこちなさに対して一線を画するほどの洗練された技術を示している。ハッダの美術は、テーマは仏教に仰いでいるが、様式はインドからの断絶を示している。この美術の作者は恰かもインドやインド人を知らないかのようなのである。そのため、アレクサンドリアの工人がこの地に移住してきたのだと考える学者もいる。いま、ローマ帝国内の美術との類似性を示すものについて、バルトゥーがあげたものを列挙してみよう。アレクサンドロス大王の顔に似た菩薩像、ナポリ博物館のアフロディテに似た菩薩像。ギリシア・ローマ古典派、アレクサンドリア、ポンペイ、小アジア(タルソス、スミルナ)、西洋中世のキリスト教寺院の装飾、等の人

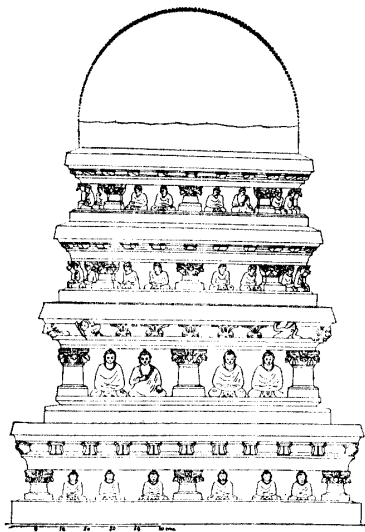
8 図 タパイカハリハの平面図 ([9]より)



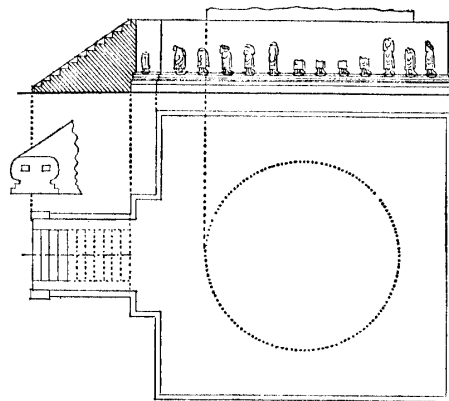
9 図 バーグ・ガイの平面図 ([9]より)



10 図 ([9]より)



11 図 ([9]より)

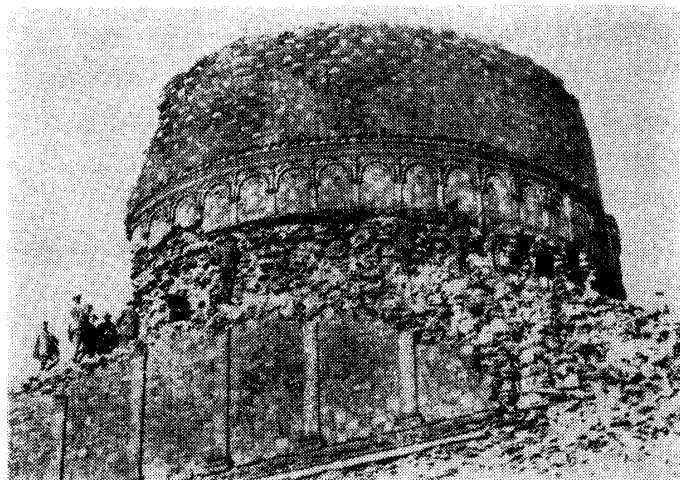


として動物や兵士におきかえられている。仏像は龕 (niche) の中にある。龕の形には台形、半円形、三葉形の三種がある。台形の龕の輪郭はエジプトの塔門 (pylone) を思わせる⁵⁰⁾。

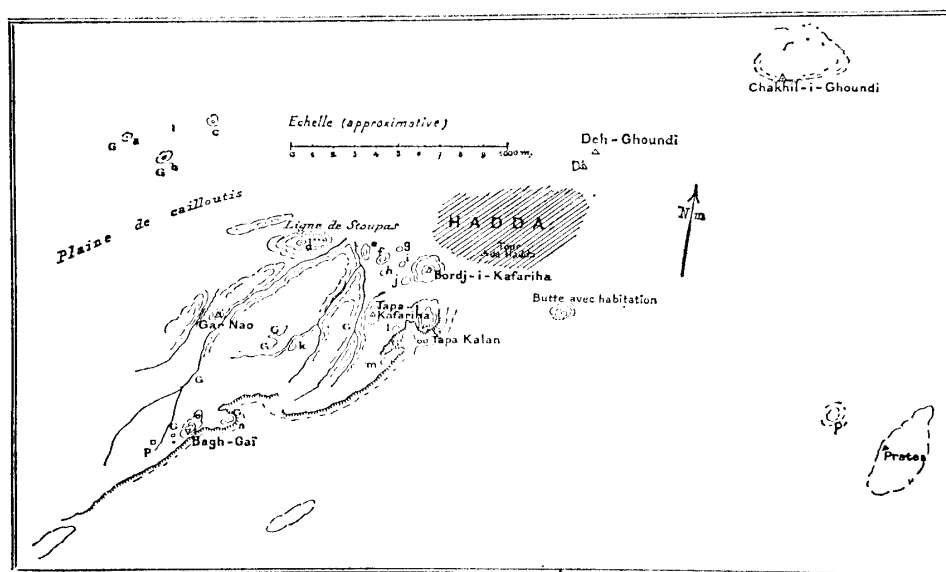
千個以上も出土したという像はもと塔や僧院の周囲を飾っていたものである。それはそれらの建築物の基壇の周囲に落ちて堆積していた。バルトゥーは、それらは塔や僧院が廃棄されたのち、自然にくずれ落ちたものとみている⁵¹⁾。これらの像に接してひとが最初にうける印象は、(1)その材料が殆んどストッコである、(2)非常に洗練された技術を示している、(3)仏頭はかなりの画一性を示している、ことなどである (14図、15図、16図参照)。

ストッコの使用は、ガンダーラ地方でそれ以前から用いられていた石の材料に比べて、人間の表情の微細な表現を容易にする結果を生んだ。石像の顔は固く、動きを欠くが、ストッコ像 (と

6 図 ダルンタの塔の一つ(Vieille Route, Vol. I, Pl. XXXII より)



7 図 ハッタおよび発掘された遺蹟 ([9] より)



(8図, 9図参照)。

塔の標準的な構成は、下から順に、正方形の台 (corps) 2つ、円形の台2つ、ドームである⁴⁷⁾ (10図, 11図参照)。ドームは多くの場合、崩れ落ちて、形をとどめていない。台 (corps) は基部 (base) と台本体 (corps proprement dit) とエンタブレチュア (entablement) の三つからなる。バルトゥーによれば、基部は常に浮彫式になっており、台石 (plinthe), 大玉縁 (tore), 剝
剝形 (congé) の連続からなる「イオニア的要素」をもつ⁴⁸⁾。台本体の壁面は、多くの場合、つけ柱 (pilastre) と仏像とで飾られている (12図, 13図参照)。バルトゥーはつけ柱にもイオニア的要素を認めている。「つけ柱の台石 (socle) はイオニア的で、単純である、すなわちスコッチア (scotie) を持たない。⁴⁹⁾」エンタブレチュアには軒持送り (modillon) があるが、これがとき

この国の風俗について、「仏法を崇敬し、少しく異道を信ず」と記したが、一方では、次のような記事を書きのこしている。「伽藍は多しと雖も、僧徒は寡少なり。諸の窣堵波は荒蕪して、圯壊せり。天祠は五所、異道は百余人あり。」「城内には大窣堵波の故基あり。これを先志に聞くにいわく、昔は仏歯ありて、高広にして、蔽麗なりしと。今はすでに歯はなく、唯々故基のみをのこせり。」「庭宇は寂寥にして、絶えて僧侶なし（筆者註、城の西南20余里の伽藍のこと）。」ハッダはこれに比べればまだ仏教の聖地としての伝統を保っていたようである。玄奘は「城中の居人は淳質にして、正信なり」と記し、またハッダへの参詣者の多かった様子を書きしるしている。しかし、かつて法顕が目撃したごとく、国王が毎朝、大鼓、螺、銅鉢の音とともに仏頂骨精舎に赴いて供養を行ない、それから国政を聴いた、というような賑わいはすでに失われていたようである。

8世紀前半、慧超はナガラハーラの付近をインド側からアフガニスタンがわへ通りぬけた。しかるに彼はナガラハーラには一言も言及していない。（彼の径路は建駄羅国、烏長国、拘衛国〔＝奢摩褐羅閼国〕、覽波国、罽賓国の順であった⁴⁰⁾。）8世紀後半、悟空も拘緯国、藍婆国、烏伏那国などを通過しているが、やはりナガラハーラには言及していない⁴¹⁾。もしかするとナガラハーラはランパカ〔覽波国、藍婆国〕に含まれたのかもしれない。

西北インドの仏教はエフタル族のミヒラクラ（6世紀初頭）によって大いに打撃をうけたと予想される。しかし、それ以後も仏教は存続した。仏教衰亡の大きな原因になったのはヒンズー教であり、ヒンズー教化して辛うじて命脈を保っていた仏教がやがてイスラム教によって息のねをとめられたのである。

（ii）遺蹟によって知られる事実

こんどは、遺蹟の調査から知られうる事実をみてみよう。

ナガラハーラの遺蹟は、マッソンによれば、ジェーラーラーバードの西方、カーブル川の南岸のチャハル・バーグの附近（そこは現在 *Dasht-i-Begrām* と呼ばれている）であり、シンプソンによれば、それよりもっと河岸寄りのダルンタである（そこにはいまも石垣がめぐっているという）という⁴²⁾。この地では後述するハッダの発掘のような組織的な調査は行なわれなかった。しかし、ダルンタには塔が残っており（6図参照）、アショーク王の碑文も発見されている。碑文はアラム語で書かれており、ナガラハーラがいかなる文化的環境のうちにあったかを示唆している。ダルンタの川ぞいには、2、3の洞窟もあるという。

一方、1830年代、マッソンによって、ビーマラーン（ジェーラーラーバード西方約11 km）の第二塔から金製の舍利容器が発見されている。この発見にアゼスの銅貨が伴ったことは、舍利容器の年代決定に大きな意味をもつ。アゼスは西紀前1世紀のサカ族の王であるから、舍利容器の製作年代もそのころと考えられたことは当然である。しかし、ロウランドの考えでは、アゼスの貨幣は第二塔の創建年代を示すかもしれないが、舍利容器のほうは遙か後世（西紀後2世紀末葉ごろ）の様式を有しており、第二塔修復のときの仏舍利再埋葬の例を示しているのだという⁴³⁾。

さて、これより詳しい調査の行なわれているハッダの遺蹟をみてみよう⁴⁴⁾（7図参照）。

塔（*stūpa*）や僧院（*vihāra*）はいわゆるガンダーラ地方のそれに比べ、特に変っていないようである。僧院については、バルトゥーはそれと類似する構築物として中近東のあるギリシア式小堡壘（*fortin*）をあげている⁴⁵⁾。すなわち、僧院は四角形の壁に囲まれ、壁の内部は中庭を中心に壁に沿って小室が並んでいる。各室の入口はいずれも規則的に隅の部分についている。バーグ・ガイとガル・ナオの僧院はこの種の典型である。各室の大きさは約 2.60 m × 3 m である⁴⁶⁾

古代世界においては、一民族が他民族を征服し、あるいはこれと接触した場合、一方の神は他方のパンテオンに編入されるのが一般的現象であった。例えば、クロノスがその子ゼウスに敗れる話は、先住民族のペラスゴイ族が新来のギリシア民族に征服された事実を神話化したものと解釈されうる³¹⁾。また、アフロディテはセム族のアシュタルテがギリシアに入ったものである³²⁾。西北インドもまたこのような精神的風土の中にありえたことは、前述（本論 P.199）のごとき事柄にかんがみて、十分考えられることである。例えば、パーミヤーンで仏教の聖蹟がイスラムの聖蹟に変えられ、仏教のジャータカがイスラム化されて伝えられている例がある。そのイスラム化された伝説とは次のとおりである。「アリー（マホメットの甥）はもはや施すべき何物も持たなかったで、彼に恵みを乞いにきた貧しい男に自らをさし出した。彼は彼を1000ルピーで売ろうと男に言った。男は彼を市場で売ろうとしたが、人々はその高いのに驚いた。ついに王が三条件を以て買うことにした。三条件とは(1)国を荒す竜を殺すこと、(2)堤防を築くこと、(3)アリーの首を王に与えること。アリーは(1)、(2)を実行し、(3)を実行すべく王の前に首をさし出した。王は感嘆して回教徒になった。」³³⁾ この伝説の中にジャータカがいくつ入っているか、読者は本論の註(30)によって容易に比較することができるであろう。このような土地では、シャカが神話の中で他の神と結びつけられることは何でもなかったにちがいない。

次に、四分律によると、然灯仏は提婆跋提城の住民に、現世に対する執着心を捨てさせるため、一城を化作し、これを焼失せしめたという³⁴⁾。一方、ヒンズー教では、シヴァ神が敵との争いにおいて、鉄の城、金の城、銀の城を焼き払った話が語られている³⁵⁾。「城を焼く」というテーマが仏教的改装を施されて、四分律の中に入ったとみられないこともない。

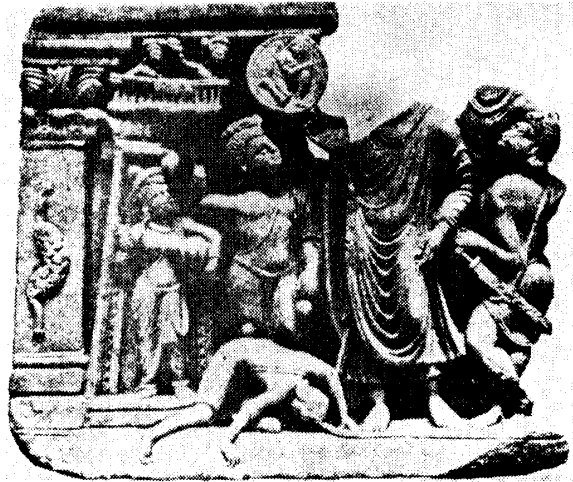
次に、シヴァの信奉者たちは髑髏を身の飾りとし、または飲器とするが、髑髏の彫刻がハッダの仏教遺蹟から出ることも、然灯仏とシヴァを結びつける材料の一つになろう。

然灯仏についてはこれくらいにして、次に当地で行なわれた仏教の一般的性格およびその盛衰について検討してみよう。

法顕は、彼が旅行した土地の仏教について、時として、それが大乘であるか、小乗であるかの区別を記している。それによれば、当時、概して小乗仏教が盛んであり、大乘仏教は僅かの土地（于闐、子合では僧は大乘を学び、羅夷国と毘荼では大小乗を兼ね学んでいた。また、パータリプトラには摩訶衍僧伽藍が造られていた³⁶⁾）にしかおこなわれていなかった。ナガラハーラとハッダの仏教については、その区別は記されていない。ただ、仏教が盛んであったことだけは確かである。これに関連して次の事実がある。如来の仏鉢なるものは、もと中印度のマガダ国にあったが、法顕当時には、ナガラハーラの東隣りのプルシャプラ市に移されていた³⁷⁾。のちの玄奘時代になると、仏鉢はさらに波剌斯国に移されていた³⁸⁾。この事実、というよりむしろ伝説では、仏鉢は仏教の象徴の如くである。そして、仏鉢の移動は、仏教の中心地の移動を反映しているかのようなものである。もちろん、それは全インドが承認する伝説ではないかもしれない。しかし、少なくとも、プルシャプラ市が西紀400年ごろ自ら仏教の中心地をもって認じ、ナガラハーラがそれに劣らぬ繁栄をみせていたということは認めてよいだろう。

6世紀中葉に書かれた「洛陽伽藍記」には、「道業伝にいわく」として、「那迦羅可国」のことが紹介されている³⁹⁾。まず仏頂骨の記事があり、のちに仏影窟の話がある。「洛陽伽藍記」にはすでにエフタル族の跋扈の様子が示されているが、ナガラハーラの仏教が被害をうけたという記事はない。

しかるに、7世紀前半、玄奘がここを訪れたときは、仏教は明らかに衰勢に向っていた。彼は

5 図 布髪授記の伝説 (Foucher: *L'Art Gréco-Bouddhique du Gandhara, Tome I, p. 277* より)

前生のシャカが伏して髪を地に敷きのべている。然灯仏がその髪の上を渡っている。然灯仏の前に立って右手をあげ、花を投げているのは同じくシャカ。その上のメダルの中の人物は授記をうけたシャカを表わす。左方には、右手に花をもち左手に甕をもつ女（のちのヤショーダラー妃）がいる。この断片はいま大英博物館に所蔵されている。

先ず、アレクサンドロス大王時代、ナガラハーラに、ある有名な神が信仰されていた。次に、アショーカ王時代の前後から、ナガラハーラに仏教が進出してきた。その仏教は土着の信仰と衝突した。仏教は土着の信仰を仏教の信仰体系に組入れる必要に迫られた。そこで考えだされたのが、前生において、土着の神と仏教の開祖を結びつけることであった。前者は後者を授記という形によって承認し、正統づけ、後者は暗れて土着人の信仰の中に入ることができた、と。

また、これに関連して、「仏影窟」が「プロメテウスの洞窟」に由来するのではないかということも論じた。すなわち、

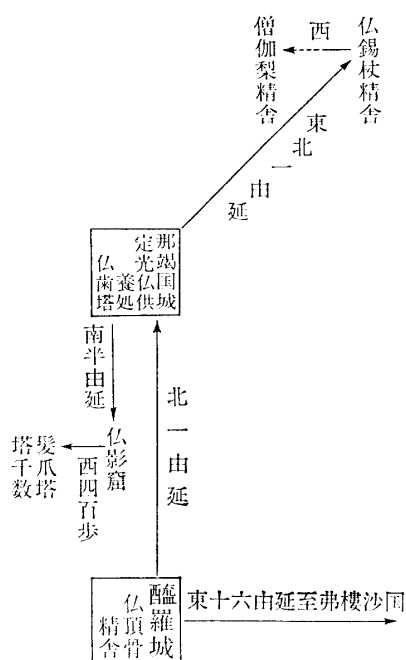
ギリシアの歴史家の記録に「パロパミソス山中にプロメテウスの縛られていた洞窟がある」とある。一方、法顕や玄奘は「仏影窟」の存在を記し、玄奘は山を登って、そこに参拝した。このことを考察するに、土着宗教の聖蹟が、後に仏教徒によって、仏教徒風に転用されたのだと考えられなくもない、と。

これは飽くまでも一つの推理にすぎない。それはいまのところ決定的な証拠を何ももたない。従って、次のような反論も有力である。すなわち、西北インドにはシャカの前生物語（本生、ジャータカ）に因む聖蹟が沢山ある³⁰⁾。西北インドの各国は、数ある前生物語の中から、勝手に自分の好きなものを選んで自分の土地に結びつけたのだ。ナガラハーラの然灯仏伝説もその例にもれない、と。

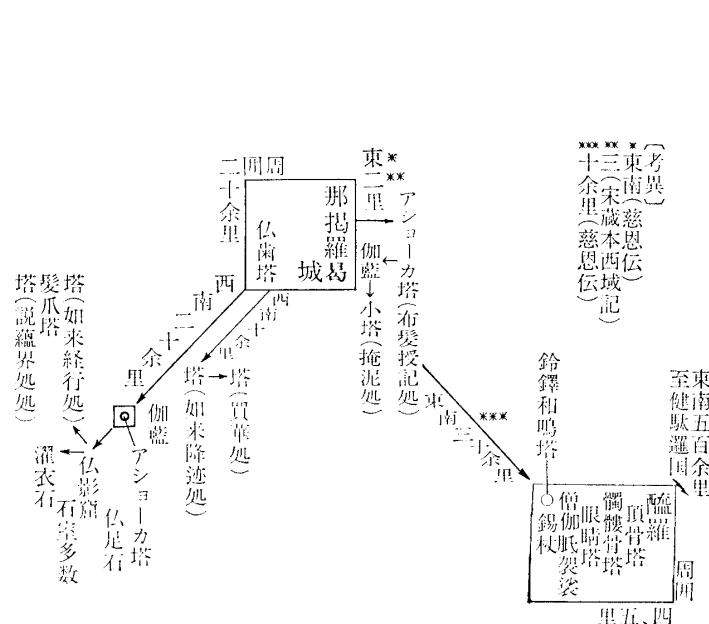
しかし、ここでは「然灯仏＝シヴァ」なる仮説（筆者の推理はそこまではいかなかった。筆者は単に「然灯仏＝土着の神」と考えたに留まる。しかし、その土着の神がシヴァであっても構わないので、いまこの仮説をとりあげる）に有利な材料をさらに、二三つけ加えることとする。

あまりの僧あり。この処には、諸の羅漢、辟支仏の塔あり、乃し千数あり。ここに止まること冬三月、法顕等三人は南のかた小雪山をわたる。雪山には冬も夏も積雪あり、山の北陰の中にて寒風の暴の起るにあいて、人みな噤戦し、慧景一人はまた進むに堪えず、口より白沫を出して、法顕につげていわく、われまた復活せじ、すなわち時に去るべし、得てともに死することなかれと。ここにおいて遂に終う。法顕はこれを撫して悲号すらく、本図を果さざるに、命なりいかんせんやと²⁴⁾。

3図 法顕の記述によるナガラハーラ国地図



4図 玄奘の記述（大唐西域記）によるナガラハーラ国界地図



この記事の内容は玄奘の「大唐西域記」²⁵⁾や彼の伝記「大慈恩寺三蔵法師伝」²⁶⁾のそれとよく合致する（3図、4図参照）。法顕・玄奘の記事の中で興味ある問題として、然灯仏（定光仏）の伝説がある。（然灯仏の布髪授記の伝説は有名であり、大乘仏教の起源を論ずるとき、忘れてはならぬ問題の一つと考えられている。その伝説によれば、シャカは前生で然灯仏のために泥土に自分の髪をしき、然灯仏をしてその上をわたらしめた。シャカはその功德により、然灯仏から未来成仏の予言をうけた（5図参照））

法顕の報告によれば、然灯仏がナガラハーラに関連のあることは明かである。「慈恩伝」では、ナガラハーラが灯光城（然灯仏伝説の舞台となった町）とさえ呼ばれている²⁷⁾。また、然灯仏の布髪授記の彫刻がナガラハーラの東西、すなわち西パキスタンのシクリやアフガニスタンのフンドキスタンから発見されている²⁸⁾。このことは、ナガラハーラが然灯仏発祥の地であることと矛盾しない。しかし、この場合は、むしろ肝腎のナガラハーラからそれが一つも発見されていないことをこそ問題とすべきかもしれない。

然灯仏なる仏の起源がアレクサンドロス大王の時代の「ディオニュソス」にあるのではないかということについては、すでに別の論文で論じた²⁹⁾。その論文で筆者が行なった推理の部分抜きを抜粋してみよう。

えてインドへ入るとき、タシュクルガンからギルギットへ通ずるミンタカ越えルートを利用したようである²¹⁾。彼等はパンジャブ平原地域へ出ても、ただちに東方のインド中央部へ向かうことをせず、いったん逆方向のナガラハーラに詣でた。彼等をそこに惹きつけたものは何か。それはナガラハーラの仏影窟であり、仏歯であり、ハッダの仏頂骨であった。なかんずく仏影窟は経典「観仏三昧海經」にも説かれていた²²⁾（ただし、この経典の中国語への翻訳は、現存する文献による限り、法顕帰国後の西紀420年²³⁾である）。すなわち、この地は当時の一大仏教聖地であったのである。

「法顕伝」の記事を引用しよう。

慧景、慧達、道整は先に那竭国（ナガラハーラ国）に向い、仏影、仏歯および頂骨を供養せしが、慧景病み、道整住まりて看、慧達一人還って弗楼沙国において相見ゆ。しかして、慧達、宝雲、僧景はついに秦土に帰り、慧景(?)は仏鉢寺にありて無常せり。これによって、法顕ひとり進んで、仏頂骨所に向う。西に行くこと16由延にして、那竭国界の醯羅城（ハッダ城）に至る。城中には仏の頂骨の精舎あり、ことごとく金薄七宝をもって校飾せり、国王は頂骨を敬重し、人の抄奪せんことを慮り、すなわち国中の豪姓八人を取り、人ごとに一印を持たしめて印封して、守護し、清晨に八人ともに到り、おのおのその印をみて、しかるのちに戸を開く。戸を開きおわって、香汁をもって手を洗い、仏の頂骨を出して、精舎の外なる高座の上に置くに、七宝の門礎をもって下に礎し、瑠璃の鍾をもって上をおおう。みな珠璣にて校飾せり。骨は黄白色にして、方円四寸ありて、その上は隆起せり。毎日出してのち、精舎の人は則ち高樓にのぼって太鼓をうち、螺を吹き、銅鉢をたたく。王は聞きおわって、すなわち精舎に詣り、華香をもって供養し、供養しおわれれば、次第に頂戴して去る。東門より入りて、西門に出ず。王は朝朝かくのごとく供養礼拝して、しかるのちに国政を聴く。居士長者もまた先ず供養して、すなわち家事を修む。日々かくの如くし、初めより懈怠なし。供養すべて訖われれば、すなわち頂骨を精舎の中にかえす。七宝の解脱塔あり、或いは開き、或いは閉ず。高さ五尺ばかりあり、もってこれを盛る。精舎の門前には朝朝つねに華香を売る人あり。およそ供養せんと欲するものは、種々これを買う。諸国の王もまた恒に使いを遣わして、供養せしむ。精舎の処、方30歩は、また天震い、地裂くといえども、この処は動かざるなり。

これより北に行くこと1由延にして、那竭国城に到る。これ菩薩がもと銀錢をもって五茎の華を賈いて、定光仏を供養せし処なり。城中にまた仏歯の塔ありて、供養すること、頂骨の法の如し。城の東北1由延にして、1谷口に到るに、仏の錫杖あり。また精舎を起して、供養せり。杖は牛頭旃檀をもって作り、長さ丈六七ばかりあり。木筒をもってこれを盛る。正にまた百千人も挙て移すこと能わざるなり。谷口より入りて西に行けば、仏の僧伽梨あり。また精舎を起して、供養せり。かの国の土俗、亢旱のときには、国人相率いて、衣を出して、礼拝供養するに、天すなわち大いに雨ふらす。那竭城の南半由延に石室あり。山に搏って西南に向けり。仏この中に留影あり。10余歩を去ってこれを観るに、仏の真形の如く、金色の相好は光明炳として著かなり。転々近づけば、転々微にして、髣髴として有るが如し。諸方の国王が王画師を遣わして、模写せしむれども、能く及ぶものなし。かの国人の伝に言う、千仏は尽くここにおいて影を留めたもうと。影の西のかた四百歩ばかりに、仏が在せしときに、髪を剃り、爪をきりて、仏みずから諸弟子とともに塔をつくりたまひしものあり。高さ七、八丈あり、もって将来の塔の法となす。いまもなお在り。辺に寺ありて、寺中には七百

の「クレイソボラ」(Kleisobora)も「クリシュナプラ」(Kṛṣṇapura)である可能性が強い¹⁵⁾。

ディオニュソスとヘラクレスについては次のような記事もある。「山地の人々はディオニュソスの讃歌を唱え……, 平地の哲学者はヘラクレスを崇拜する¹⁶⁾。」また, ある記事¹⁷⁾は, インダス流域における, シバ族(Sibai)とシュードラカ族(Sydrakai)の相対的位置関係に関し, 前者が北に, 後者が南に住んでいたことを推察せしめる。これらの記事を総合すれば, 山地の種族であるシバ族がディオニュソスを信仰し(ナガラハーラはこちらに所属し), 平地の種族であるシュードラカ族がヘラクレスを信仰していた(マトラーはこちらに入る)という図式をたてることもできそうである。しかし, 一方では, 「シュードラカ族はディオニュソスの子孫で……, シバ族はヘラクレスの遠征に従ったものの子孫である」と記されている¹⁸⁾。種族名 Siba が神の名 Śiva となんらかの関係をもつとすれば, Siba 族がヘラクレスに結びつけられることは, Śiva をディオニュソスに結びつけるわれわれの立場とは矛盾する。しかし, 種族の移動は単純ではないであろうから, この矛盾をもって直ちにわれわれの推理を放棄する必要はない。

最後に, ナガラハーラの地そのものに, シヴァ信仰の痕跡を探ってみよう。ナガラハーラの近くに Sheva という土地がある。この Sheva はシヴァと関係がないだろうか。また, Nagarahāra という町の名自体が「シヴァの都」を意味しないだろうか。というのは, hāra は hara (破壊者, すなわちシヴァ)の形容詞で, 「シヴァの」を意味すると解釈できるからである。

また, シヴァ教徒は髑髏を用いて酒を飲んだり, 髑髏をつづって帯をつくったりした。ハッダに仏陀の「頂骨」が祀られ, また, ハッダから髑髏の彫刻がいくつも出ている¹⁹⁾(2図参照)。ハッダ(Haḍḍa, Hila)がサンスクリット語の śira (=śiras 髑髏)の訛った音である可能性も大きい²⁰⁾。

2 図 髑髏をもつ青年 ([8]Pl. 39より)



二人の青年がそれぞれ髑髏を手にし
ている。左の青年は髑髏をゆびさし
て何かを教えているようである。
それは世の無常を教えているのであ
ろうか。あるいは肉体のけがらわし
さ(いわゆる不浄観)を教えている
のであろうか。

仏教時代

(i) 文献によって知られる事実

以上の歴史を背景に, こんどは仏教時代をみてみよう。

西紀 400 年前後, 中国からインドへ赴く巡礼僧があいついだ。彼等はみな, パミール高原を越

る⁹⁾。確かに、ディオニュソス、ヘラクレス、プロメテウスという名はインドでは知られていない。しかし、これらの伝説が全く事実を含まないということはあるそうにない。すなわち、これらのギリシアの神々が実際にインドにやってこなかったとしても、彼等と性格を共通にするインドの（あるいは少なくともナガラハーラの）神々がこの地で信仰されていたことが考えられる。しからば、それらの神々とは何か。

ここで、もう一度、ギリシア史家たちが如何なる特徴をもってディオニュソス的、ヘラクレス的としたかを整理してみよう。

ディオニュソス

- 1) ニュサ
- 2) メーロス山
- 3) つた
- 4) ドラムとシンバル
- 5) まだらの着物

ヘラクレス

- 1) 洞窟
- 2) 獣皮の着物
- 3) 棍棒⁷⁾

このような特徴をもつ神々がインド神話の中にいるか。いるとすれば、それはどの神々か。ルヌーはディオニュソスをシヴァに⁹⁾、ヘラクレスをクリシュナに⁹⁾ 比定している。一方、彼はプロメテウスをシヴァの従者プラマタ (pramatha) に比定することを斥けている¹⁰⁾。

では、シヴァ神が果してディオニュソスの特徴をもつかどうかを検討してみよう。シヴァ神はヴェーダのルドラ神からその荒々しい性格をうけついだ。彼は、三身一体 (trimūrti) のドグマにおいては、創造の神ブラフマン、維持の神ヴィシュヌと並ぶ、破壊の神である。シヴァ神は、この属性においては、恍惚状態で踊り狂う神 (naṭarāja) となっても現われる。彼はまた回復、生産の神であり、リンガ (男根) がその象徴となる。さらに彼は苦行と瞑想を行なう大ヨーギンである¹¹⁾。以上の属性のうち、「恍惚状態で踊り狂う」点において、シヴァがディオニュソスと性格を一にすることは言うまでもない。また、シヴァはブラフマンの額から生れたといわれる。あるいは、悪鬼ウシャナス (Uśanas) を呑み下して腹に留め、のち精液としてこれを排出したといわれる¹²⁾。これらの伝説は、ディオニュソスがゼウスの腿にかくまわれ、そこから生みだされたというギリシアの伝説に通ずるものをもつ。ほかにも類似点をあげうるが、シヴァについてはひとまずこの程度にしておこう。

ヘラクレスの特徴とされる棍棒と獣皮の着物はシヴァにもクリシュナにもみられる。従って、この材料からだけでは、ヘラクレス＝クリシュナという結論は出せない。しかし、メガステネースが「このヘラクレスはインドの一種族であるスーラセーノイ (Sourasēnoi) によって特に尊崇される。彼等にはメトラ (Methora) とクレイソボラ (Kleisobora) という二つの大きな町があり、イオーバレース (Iōbarēs) という舟航可能な河がその土地を流れている¹³⁾」と報告している事実は、上の比定をほぼ正当づけるものである。なぜなら、インドの伝説では、クリシュナはマトラー (Mathurā) (メガステネースの Methora) で生れたからである¹⁴⁾。メガステネース

前仏教時代

ジェーラーラーバードから先史時代の遺物が発見されたということは、筆者は寡聞にして聞いていない。しかし、イラン高原が彩陶文化で覆われていた時代、この地もその文化圏に属していたことは間違いない。この文化に続いて、あるいはそれと並んで、インダス河流域にインダス文明（西紀前2500年ごろ～西紀前2000年ごろ）が出現した。このとき、西方に栄えたメソポタミア文明がなんらかの形でこの東方の地域と関係をもったことは考えられる。やがて、アーリヤ人の侵入（西紀前1300年ごろ？）があった。それはインドラやヴァルナを信仰する人々であった。ついで、ダリウス I 世がこの地をその版図におさめた（彼のインド侵入は西紀前518年？）。このペルシア支配はインドに少なからぬ影響を残した。ダリウス王の壮大な王宮はマウリヤ王朝の宮殿の建築に影響を及ぼし、また、アケメネス朝の公用語アラム語は西北インドにも用いられ、アラム文字はカローシュティー文字の母体となった。西紀前 327 年には、ギリシアのアレクサンドロス大王がインドに侵入した。ナガラハーラ市が歴史の舞台に登場するのはこのときである（但し、ナガラハーラの名では現われない）。大王はナガラハーラの攻撃を思いとどまった。その経緯についてギリシアの歴史家は次のような興味深い物語を伝えている。

大王がニュサ (Nysa) の町（これがナガラハーラのことである³⁾）を攻めようとしたとき、ニュサの町の統領アクーピス (Akouphis) なるものが町の助命を嘆願しにやってきた。そのときアクーピスは大王に次のように語った。われわれの町ニュサはディオニュソスが建設したものである。ディオニュソスはインド遠征を記念して、この町を彼の乳母ニュサに囚んでニュサと名づけ、町の近くの山を父ゼウスの腿(ギリシア語 *mēros*) を記念してメーロス (Mēros) と名づけた（伝説によれば、ディオニュソスは一時ゼウスの腿の中で育てられた）。ディオニュソスがこの町の建設者である証拠には、インドの他の地には見られないいつたがここにだけ生えている、と。大王はそれを聞いてメーロス山に登り、実際につたと月桂樹の茂っているのを見た。マケドニア兵たちは狂喜して、花輪をつくり、頭にかぶり、ディオニュソスへの讃歌をうたい、ディオニュソスの数々の名を唱えた。大王はディオニュソスに犠牲をささげ、マケドニア兵たちは叫び声をあげながら、あちらこちらへ走りまわった⁴⁾。

ギリシア神話のディオニュソスが果してこの地までやってきたかどうかは問題である。ところで、このディオニュソスのインド遠征の記事に関連して、プロメテウス伝説も語られている。すなわち、

マケドニア兵たちはパロパミソス山中において一つの洞窟をみた。そして、土地の伝説をきいて、これはプロメテウスが鎖につながれていた洞窟であるという噂を流した。そして鷲がやってきて、プロメテウスの肝を食べていたが、ヘラクレスがやってきて、鷲を殺し、プロメテウスを鎖から解きはなした⁵⁾。

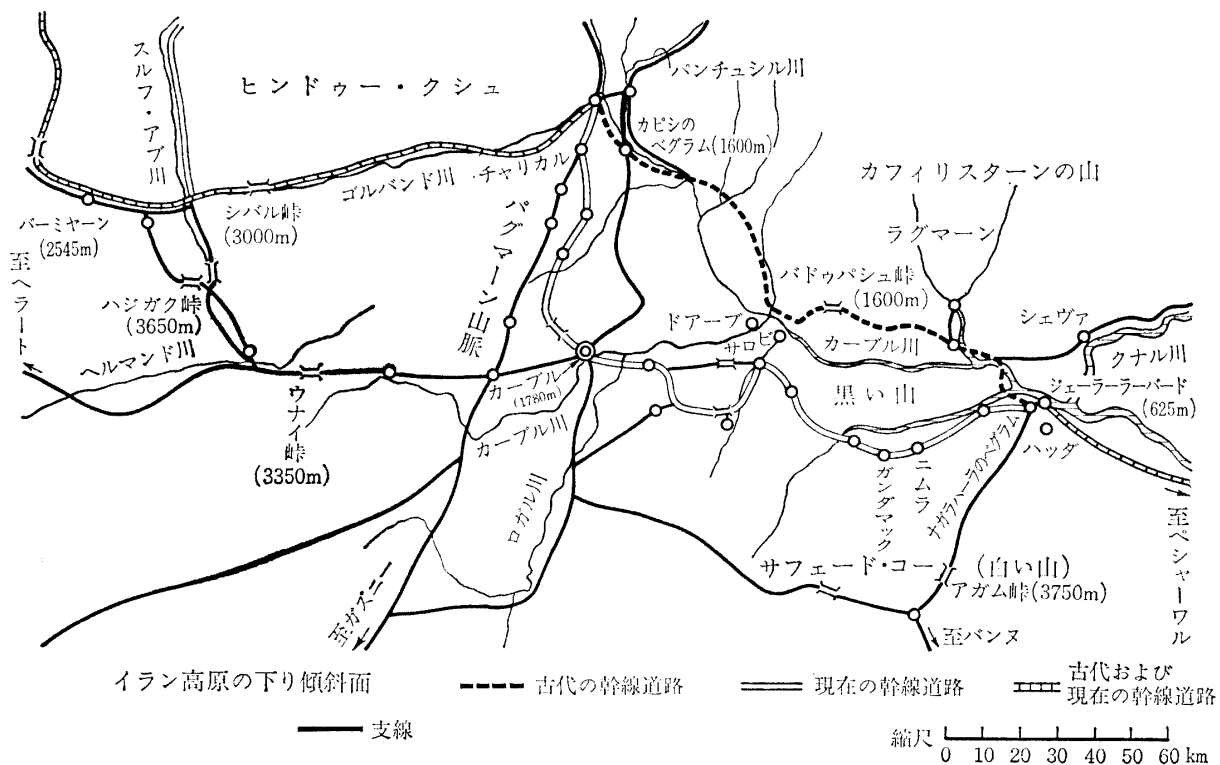
さて、アレクサンドロス大王の遠征に従ったものたちが伝えた、ディオニュソス、ヘラクレス、プロメテウスに関する伝説は果して信用しうるか否か。ストラボンも含め、すでに幾人かのギリシア人史家たちが、この伝説の信憑性について否定的態度をとっている。これらの歴史家は、上記の伝説を、アレクサンドロス大王にとりいろうとするものたちが捏造したものと考えてい

はじめに

ナガラハーラ (Nagarahāra) およびハッダ (Haḍḍa) は法顕の「仏国記」(「法顕伝」ともいう) (西紀414年編述)以来、仏教聖地として中国人巡礼僧の間によく知られていた。両聖地は互いに近接しており、法顕も、のちの玄奘も、両地を一括して記述している(法顕のいわゆる那竭国界、あるいは単に那竭国)。これらは現在アフガニスタン領内にあり、カイバル峠の西方に位置する。ナガラハーラの位置は現ジェーラーラーバード (Jelālābād) 市の西部に、またハッダのそれは同市の東南約 8 km に比定され、いずれにも遺蹟が存在する。ジェーラーラーバード (「ジェラルルの都市」) という地名は言うまでもなくイスラム時代にその起源をもつ。ナガラハーラの名はこの名をもつ古代都市の消滅とともにすたれ、それでもなお、プシュト語で Niṅgarhār なる呼び方が残っている¹⁾。また、シンプソンによれば、ジェーラーラーバードの 4,5 マイル西、スルフアブの南岸に古代都市の跡が発見されたが、土地の人々はその遺蹟をまだ Nagrak, Nagarat, Nagara などと呼んでいたという²⁾。一方、ハッダの名は一小村の名となって存続しているが、その住民は仏教には一片の同情も示さぬイスラム教徒に変わっている。このあたりの地はかつては中央アジアとインドとを結ぶ重要な軍事・通商路の通過点であった。そして、ナガラハーラは当時の二大都市カピシとペシャーワルの中間に位置していた。本論では、ナガラハーラとハッダが仏教の発展に対してどのような可能性を有したかを検討してみたい(1図参照)。

* 本論文中〔 〕にいった番号は後出参考文献に付した番号である。

1 図 (Foucher: *Vieille Route*, Vol. I, p. 31³⁾より)



ナガラハーラおよびハッダの仏教

定 方 晟